

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

第1章 総 則

(趣 旨)

第1条 この確認検査業務規程（以下「規程」という。）は、一般財団法人 日本建築センター（以下「財団」という。）が、建築基準法（昭和25年法律第201号。以下「法」という。）第77条の18から第77条の21までの規定に定める指定確認検査機関として行う確認、中間検査、完了検査及び仮使用認定に関する業務（以下「確認検査の業務」という。）の実施について、法第77条の27の規定に基づき必要な事項を定める。（る）（か）（れ）

(用語の定義)

第2条 この規程において次の各号に掲げる用語の定義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。（り）（た）

- (1) 補助員 確認検査の補助的な業務を行う職員をいう。
- (2) 確認検査員等 確認検査員及び補助員をいう。
- (3) 役員 建築基準法施行令（昭和25年政令第338号。以下「令」という。）第136条の2の14第1項第2号に規定する役員をいう。（か）
- (4) 親族 配偶者並びに一親等の血族及び姻族をいう。
- (5) 親会社等 法第77条の19第10号に規定する親会社等をいう。
- (6) 特定支配関係 令第136条の2の14に規定する特定支配関係をいう。
- (7) 制限業種 次に掲げる業種（建築主事が建築確認を行うこととなる国、都道府県及び建築主事を置く市町村の建築物に係るもの並びに建築主事を置かない市町村の建築物に係る工事監理業を除く。）をいう。
 - イ 設計・工事監理業（工事請負契約事務、工事の指導監督、手続の代理等の業務及びコンサルタント業務を含む。ただし、建築物に関する調査、鑑定業務は除く。）
 - ロ 建設業（しゅんせつ工事業、造園工事業、さく井工事業等建築物又はその敷地に係るものではない業務を除く。）
 - ハ 不動産業（土地・建物売買業、不動産代理・仲介業、不動産賃貸業及び不動産管理業を含む。）
 - ニ 昇降機の製造、供給及び流通業

第2章 確認検査の業務の公正かつ適確な実施を確保するための方針及び体制

第1節 方針・運営及び権限と責任

(確認検査の業務の実施の基本方針)

第3条 財団は、法、法に基づく命令及び条例（以下「法令」という。）、法第18条の3に基づく確認審査等に関する指針（平成19年国土交通省告示第835号。以下「指針」という。）、これらに関わる技術的助言、その他関係法令並びにこの規程の要件に従うとともに、公共の福祉の増進に資する確認検査の業務の使命に鑑み、確認検査の業務を公正かつ適確に実施するも

確認検査業務規程

頁 No.2/24

CRO 1-21

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

のとする。(り) (か)

- 2 理事長は、確認検査の業務が公正かつ適確に行われるようにするため、事業年度ごとに業務の実施に関する基本方針を定めて職員に周知する。(り) (か)

(確認検査の業務体制の運営、責任と権限)

第4条 理事長は、確認検査の業務の指定区分及び業務区域並びに業務量見込みに応じて、この規程に従って業務が公正かつ適確に行われるために必要な体制を構築するとともに、その実行のために必要な以下の規程を定め、職員（非常勤職員を含む。）に周知し、実施させる。(り) (か)

- (1) 確認検査業務等管理体制見直し規程 (CESR07)
- (2) 確認検査業務等文書管理規程 (CESR08)
- (3) 確認検査業務等記録管理規程 (CESR09)
- (4) 確認検査業務等苦情処理規程 (CESR10)
- (5) 確認検査業務等内部監査規程 (CESR11)
- (6) 確認検査業務不適格案件管理規程 (CRO4)
- (7) 確認検査業務等是正処置・予防処置管理規程 (CESR12)
- (8) 確認検査業務等機密情報管理規程 (CESR13)

- 2 前項第3号の確認検査業務等記録管理規程には、確認検査の業務に関する書類（確認検査の業務の実施の過程で行われた建築主等との打合わせ等に関する書類を含む。）の管理（保存、閲覧、廃業等の方法を含む。）を定めるものとする。(か)

- 3 理事長は、確認検査の業務の担当役員を定める。(り) (か)

- 4 確認検査の業務の実施に係る最高責任者は理事長とし、担当役員が確認検査の業務に係る管理の責任と権限をもつ。(り) (か)

- 5 財団に、法第77条の29第2項に規定する書類（建築基準法に基づく指定建築基準適合判定資格者検定機関等に関する省令（平成11年建設省令第13号。以下「指定機関省令」という。）第29条第2項の規定による記録が行われた同項のファイル又は磁気ディスクを含む。）及び確認検査の業務の実施の過程で行われた建築主等との打合せ等に関する書類（以下「記録」という。）並びに帳簿の管理の総括責任者として、総括記録管理者1名を置く。(か) (た)

- 6 総括記録管理者は、第3項に規定する担当役員をもって充てる。(か)

- 7 総括記録管理者は、記録及び帳簿の管理の実施責任者として、記録管理者を指名する。(か)

- 8 記録管理者は、本部と大阪事務所にそれぞれ1名を置く。(か)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

（確認検査の業務管理体制の見直し）

第5条 理事長は、確認検査業務管理体制が引き続き適切、妥当で、かつ効果的であることを確実にするために、年1回、次事業年度の開始前までに、定期的に確認検査の業務管理体制の見直しを行う。また、財団及び財団の業務をとりまく環境の変化、社会的要請の変化、内部監査の結果、外部からの要求等により必要と判断した場合には、随時、確認検査の業務管理体制の見直しを行う。（り）

2 確認検査の業務が公正かつ適確に行われることを確実にするために、確認検査の業務管理体制を継続的に改善する。（り）（か）

（確認検査の業務の組織体制）

第6条 理事長は、確認検査の業務に従事する職員を、第15条の確認検査員を含めて6人以上財団に置き、確認検査の業務が公正かつ適確に行なわれることを確実にするため、申請建物の規模や用途、確認検査の業務に従事する職員の構成に応じた確認検査の組織体制を構築する。（り）（か）

2 確認検査の業務は、他の業務（判定及び建築物の検査等に関する業務を除く。）と独立した部署で行う。（か）

3 確認検査員は、制限業種に従事し、又は制限業種を営む法人に所属してはならない。（か）

4 確認検査の業務に従事する職員は、その職務の執行に当たって厳正、かつ公正を旨とし、不正の行為のないようにしなければならない。（り）（か）

5 担当役員は、確認検査の業務に従事する職員が、前項を満たして業務を行うことを確実にするための措置を講ずるものとする。（か）

第2節 確認検査の業務の手順

（確認検査の業務の方法）

第7条 確認検査の業務が、この規程に従って常に公正かつ適確に行われることを確実にするため、理事長は、確認検査の具体的な手順その他確認検査の業務の実施に必要な全ての事項を含む確認検査業務実施手順書（以下「手順書」という。）及び確認・検査マニュアル（以下「マニュアル」という。）を定め、これに従い確認検査員等に確認検査の業務を実施させる。（り）（か）（た）

2 手順書及びマニュアルには、建築基準関係規定への適合の確認、検査の具体的な方法及びこれが行われたことがその全過程を通じて追跡、確認できる方法を定める。（を）（た）

3 理事長は、手順書及びマニュアルを最新の状態に維持し、確認検査員等がいつでも利用でき

確認検査業務規程

頁 No.4/24

CRO 1-21

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

るようにする。(り) (か) (た)

(建築基準関係規定の改正等に伴う措置)

第8条 財団は、建築基準関係規定の改正、国土交通大臣等及び特定行政庁等からの指示・連絡等に係る文書を収集・保存し、職員に周知・徹底するものとする。(か) (た)

(判断するための根拠資料及び対応方法)

第9条 確認検査員は、建築基準関係規定の解釈、都市計画に関する状況等を明確に判断するため、次に掲げるものを根拠資料とし、これに基づき審査するものとする。(か)

- (1) 前条の文書
- (2) 建築基準関係規定の解釈等について特定行政庁が公表している情報又は発行している資料
- (3) 都市計画に関する状況等(道路種別含む。)について地方公共団体が公表している情報又は発行している資料

2 確認検査員は、前項の根拠資料では建築基準関係規定の解釈、都市計画に関する状況等を明確に判断できない場合は、次に掲げる対応方法により審査するものとする。(か)

- (1) 建築基準関係規定の解釈等についての法第77条の3第1項の特定行政庁への照会
- (2) 都市計画に関する状況等(道路種別含む。)についての地方公共団体への照会

第3節 文書管理及び記録の管理

(文書管理)

第10条 確認検査の業務に係る規程(以下「業務文書」という。)は、作成に先立ち、権限を与えられた者がその適切性を審査し、承認する。(り) (か)

2 業務文書は、必要に応じ更新し、履歴を記録する。(り)

(記録の管理)

第11条 記録は、審査中を除き施錠可能な保存場所に保存するものとし、確認済証、中間検査合格証又は検査済証交付後は遅滞なく常時施錠された保存場所に移管のうえ保存することとする。(り) (か) (よ)

2 記録は、当該建築物又は工作物に係る法第6条第1項又は法第6条の2第1項の規定による確認済証(計画の変更に係るものを除く。)の交付の日から15年間保存するものとする。(り) (か)

3 記録は、容易に識別、検索でき、必要に応じて参照できるよう適確に保管、管理を行うものとする。(か)

確認検査業務規程

頁 No.5/24

CRO 1-21

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

(記録管理簿の調製)

第12条 総括記録管理者は、記録を適切に保存するため、記録管理簿を調製し、記録管理者に記載させる。(か)

2 記録管理簿には、少なくとも以下に掲げる事項を記載する。(か)

- (1) 確認済証番号
- (2) 件名
- (3) 保存場所
- (4) 保存期間の満了する日

(記録及び帳簿の保存方法)

第13条 記録及び帳簿は、確実、かつ秘密の漏れることのない方法で保存する。(り) (か)

2 記録及び帳簿が、電子計算機に備えられたファイル又は磁気ディスクに記録され、必要に応じ電子計算機その他の機器を用いて明確に紙面に表示されるときは、当該記録及び帳簿に代えることができる。(り) (か)

3 前項の場合において、紙面に表示したものがある場合は、電子計算機に備えられたファイル又は磁気ディスクに記録された記録又は帳簿を原本とする。(り) (か)

(記録の持出し)

第14条 役員及び職員は、記録(複写したものを含む。この条において同じ。)を執務室等の外に持ち出す場合は、記録管理者に、持ち出す目的及び持ち出す先を報告するとともに、持ち帰ったときはその旨を記録管理者に報告するものとする。(か)

第4節 確認検査員等

(確認検査員の選任)

第15条 理事長は、確認検査の業務を実施させるため、制限業種に従事する者(制限業種を営む法人に所属する者(過去2年間に所属していた者を含む。以下同じ。))を含む。以下同じ。)以外の者から常時雇用職員である確認検査員を4名以上選任し、うち2名以上を専任とする。(り) (か) (た)

2 前項の確認検査員の数は、前年度の確認、中間検査、完了検査及び仮使用認定の実績に応じ、指定機関省令第16条の規定により必要とされる人数以上となるように毎年度見直しを行うこととする。(り) (れ)

3 前2項の規定に関わらず、理事長は、確認、中間検査、完了検査及び仮使用認定の申請件数の増加が見込まれる場合にあつては、すみやかに、新たな確認検査員(非常勤の確認検査員を含む。)を雇用する等の適切な措置を講ずる。(り) (れ)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

(確認検査員の解任)

第16条 理事長は、確認検査員が次のいずれかに該当する場合は、その確認検査員を解任する。

(ろ) (り) (か) (た)

- (1) 法第77条の20第5号の規定に適合しなくなったとき。
- (2) 法第77条の24第4項の規定による国土交通大臣の解任命令があったとき。
- (3) 法第77条の62の規定により国土交通大臣の建築基準適合判定資格者登録の削除があったとき。
- (4) 前号のほか、職務上の業務違反その他確認検査員としてふさわしくない行為があったとき。
- (5) 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められるとき。

(確認検査員の配置)

第17条 確認検査の業務を実施させるため、確認検査員を本部に3名以上、大阪事務所に1名以上配置する。(り) (か)

2 大阪事務所の確認検査員が休暇を取る場合その他の事情により、確認検査の業務を実施できない場合にあっては、本部の確認検査員が大阪事務所において臨時に確認検査の業務を行うこととする。ただし、緊急の場合にあっては、本部で確認検査の業務を行うことができる。(り) (か)

3 第15条第3項の規定に基づく処置を行った場合には、本部及び事務所がそれぞれその見込まれる業務量を適正に処理できるよう、確認検査の業務に従事する職員の配置を見直す。(か)

(確認検査員等の身分証の携帯)

第18条 確認検査員等が、建築物等、建築物等の敷地若しくは建築工事場等に立ち入る場合においては、その身分を示す証明書を携帯し、関係者に提示しなければならない。(り) (か)

2 前項の身分証の様式は、確認検査員証及び確認検査補助員証(別記様式CF21及び22)による。(り)

第3章 確認検査の業務の実施方法等

第1節 一般

(確認検査の業務を行う時間及び休日)

第19条 確認検査の業務を行う時間は、休日を除き、午前9時15分から午後5時45分までとする。(ぬ) (か)

2 前項の休日は、次のとおりとする。(り) (る) (た)

- (1) 日曜日及び土曜日

確認検査業務規程

頁 No.7/24

CRO 1-21

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

(2) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日

(3) 12月29日から翌年の1月3日までの日（前号に掲げる日を除く。）

- 3 第1項の確認検査の業務を行う時間及び前項の休日の規定については、緊急を要する場合又は事前に財団と建築主との間において確認検査の業務を行うための日時の調整が図られている場合は、これらの規定によらないことができる。（り）（か）（た）

（事務所の所在地及びその業務区域）

第20条 確認検査の業務の業務区域は日本全域とする。（に）（り）（た）

- 2 本部の所在地は、東京都千代田区神田錦町一丁目9番地とし、その業務区域は、北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県の全域とする。（ろ）（に）（と）（ち）（り）（を）

- 3 大阪事務所の所在地は、大阪府大阪市中央区南本町一丁目7番15号とし、その業務区域は、富山県、石川県、福井県、岐阜県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県の全域とする。（い）（ろ）（に）（と）（り）

- 4 建築主が希望した場合において財団との協議が整った場合及び緊急の場合においては、本部の業務を大阪事務所で、大阪事務所の業務を本部で行うことができるものとする。（に）（り）

（業務の範囲）

第21条 確認検査の業務を行う範囲は、別紙に示す「確認検査対象建築物等」に規定する建築物等（以下「対象建築物等」という。）に係る確認、中間検査、完了検査及び仮使用認定とする。（り）（か）（れ）

- 2 前項の規定に関わらず、財団は、次の第1号から第4号までに掲げる者が建築主である対象建築物等、第3号から第7号までに掲げる者が設計、工事監理、施工その他の制限業種に係る業務を行う対象建築物等その他確認検査の業務の公正な実施に支障を及ぼすおそれがある者が関与する対象建築物等について、その確認検査の業務を行わない。（り）（か）（た）

(1) 理事長又は担当役員

(2) 前号に掲げる者が所属する企業、団体等（過去2年間に所属していた企業、団体等を含む。）

(3) 第1号に掲げる者の親族

(4) 第3号に掲げる者が役員である企業、団体等（過去2年間に所属していた企業、団体等を含む。）

(5) 第1号又は第3号に掲げる者が総株主（株主総会において決議をすることができる事項の全部につき議決権を行使することができない株主を除く。以下同じ。）又は総出資者の議決権の百分の五以上を有している企業、団体等

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

- (6) 財団又は財団の親会社等が特定支配関係（令第136条の2の14第1項第3号に該当する関係を除く。）を有する者
- (7) 財団の役職員が代表者の地位を占める企業、団体等（過去2年間に代表者の地位を占めていた企業、団体等を含む。）

3 財団は、法第77条の20第6号に定める指定構造計算適合性判定機関のほか、次のいずれかに該当する指定構造計算適合性判定機関に対してされた構造計算適合性判定の申請に係る建築物の計画について、確認をしてはならない。（た）

- (1) 財団の理事長又は担当役員が所属する指定構造計算適合性判定機関（過去2年間に所属していた指定構造計算適合性判定機関を含む。）
- (2) 財団の理事長又は担当役員の親族が役員である指定構造計算適合性判定機関（過去2年間に役員であった指定構造計算適合性判定機関を含む。）
- (3) 理事長若しくは担当役員又はこれらの者の親族が総株主又は総出資者の議決権の百分の五以上を有している指定構造計算適合性判定機関
- (4) 指定構造計算適合性判定機関の代表者又は担当役員（過去2年間に代表者又は担当役員であった者を含む。）が財団に所属する場合にあつては、当該指定構造計算適合性判定機関
- (5) 指定構造計算適合性判定機関の代表者又は担当役員（過去2年間に代表者又は担当役員であった者を含む。）の親族が財団の役員である場合にあつては、当該指定構造計算適合性判定機関
- (6) 財団が総株主又は総出資者の議決権の百分の五以上を有している指定構造計算適合性判定機関
- (7) 財団が特定支配関係を有する指定構造計算適合性判定機関
- (8) 財団の親会社等が特定支配関係（令第136条の2の14第1項第3号に該当する関係を除く。）を有する指定構造計算適合性判定機関

4 第2項及び第3項の場合に該当するかどうかの確認は、担当役員が第2項及び第3項に掲げる者の一覧を作成し、職員が当該一覧と申請書類等を照合する方法により行う。（か）（た）

5 確認の業務の範囲（法第6条の3第1項ただし書きの規定による審査を行うか否かを含む。）及び第3項の指定構造計算適合性判定機関については、ウェブサイトへの掲載その他適切な方法により公表を行う。（た）

（確認検査の業務の処理期間）

第22条 財団は、申請建物の規模や用途に応じた標準的な確認検査の業務の処理期間を定め、提示する。（り）（か）

第2節 確認

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

(確認申請)

第23条 建築主（法第87条の2第1項において準用する場合は設置主、法第88条第1項において準用する場合は築造主。以下同じ。）は、確認の申請に際し、建築基準法施行規則（昭和25年建設省令第40号。以下「施行規則」という。）第1条の3、第2条の2又は第3条（これらの規定を第3条の3第1項から第3項まで又は第8条の2第1項、第6項若しくは第7項において準用する場合を含む。）の規定による申請書に次に掲げる書類を添えて財団に提出する。（り）（た）

(1) 次の通知書の写し（該当する場合に限り。）それぞれ2通

イ 施行規則第10条の4に規定する許可関係規定による特定行政庁の許可通知書

ロ 施行規則第10条の4の2に規定する認定関係規定並びに法第86条第1項又は第2項及び法第86条の2第1項の規定による特定行政庁の認定通知書

ハ 法第86条の5第2項の規定による特定行政庁の認定取消通知書

(2) 法の規定に基づく条例の規定による地方公共団体の長の許可書及び認定書の写し（該当する場合に限り。）2通

(3) 地方公共団体が道路・敷地に関し証明書等を発行している場合は当該証明書等 1通

2 前項の申請（施行規則第11条の3第3項に定める提出に限る。）は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織（財団の使用に係る電子計算機（入出力装置を含む。以下同じ。）と建築主の使用に係る入出力装置とを電気通信回線で接続した電子情報処理組織をいう。以下同じ。）又は磁気ディスク（これに準ずる方法により一定の事項を確実に記録しておくことができる物を含む。以下同じ。）にて行うことができる。（り）（た）

(確認申請の引受及び契約)

第24条 財団は、前条の確認の申請があったときは、次の事項について審査してこれを引き受ける。（り）（か）（た）

(1) 申請のあった建築物等が対象建築物等であること。

(2) 設計者が当該計画の設計資格を有し、かつ建築士法（昭和25年法律第202号）の規定に違反していないこと。

(3) 提出図書に不足がなく、かつ記載事項に漏れがないこと。

(4) 申請に係る計画の内容に明らかな瑕疵がないこと。

(5) 第21条第2項及び第3項の規定に該当するものでないこと。

2 前項の規定において、確認申請関係図書に不備を認めるときは補正を求め、補正の余地のないときは引き受けできない理由を説明し、確認申請関係図書を建築主に返還する。（り）

3 第1項により申請を引き受けた場合には、財団は、建築主に引受承諾書（別記様式CF13）を交付する。この場合、建築主と財団は別に定める「確認検査業務約款」（以下「業務約款」という。）に基づき契約を締結したもとする。（り）

4 建築主が、正当な理由なく、引受承諾書に定める額の手数料を業務約款に規定する支払期日までに支払わない場合には、財団は第1項の引き受けを取り消すことができる。（り）

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

5 財団は、前条及び前4項の規定にかかわらず、確認、中間検査、完了検査又は仮使用認定の申請件数が見込みを相当程度上回った場合において、適正に確認を実施することが困難な場合には、確認業務を引き受けない。(り)(か)(た)(れ)

(業務約款に盛り込むべき事項)

第25条 前条の業務約款には、少なくとも次の事項を盛り込むこととする。(り)(か)(た)(ね)

- (1) 建築主は、財団の請求があるときは、財団の確認業務遂行に必要な範囲内において、申請に係る計画に関する情報を遅滞なくかつ正確に財団に提供しなければならない旨の規定
- (2) 建築主は、申請に係る計画に関し財団がなした建築基準関係規定への適合性の疑義等に対し、追加検討書の提出その他の必要な措置をとらなければならない旨の規定
- (3) 財団は、財団の責めに帰することができない事由により、業務期日までに確認済証を交付できない場合には、建築主に対しその理由を明示の上、業務期日の延長を請求することができる旨の規定

(確認の実施)

第26条 財団は、確認申請を引き受けたのち速やかに、申請に係る計画が建築基準関係規定に適合しているかどうかの審査を確認検査員に実施させる。(り)

2 確認検査員等は、次の第1号から第4号までに掲げる者が建築主である建築物、第1号から第5号までに掲げる者が設計、工事監理、施工その他の制限業種に係る業務を行う建築物又は判定を行う建築物その他確認検査の業務の公正な実施に支障を及ぼすおそれがある者が関与する建築物について、確認の業務を行わない。(り)(た)

- (1) 当該確認検査員等
- (2) 第1号に掲げる者が所属する企業、団体等(過去2年間に所属していた企業、団体等を含む。)
- (3) 当該確認検査員等の親族
- (4) 第3号に掲げる者が役員である企業、団体等(過去2年間に役員であった企業、団体等を含む。)
- (5) 第1号又は第3号に掲げる者が総株主又は総出資者の議決権の百分の五以上を有している企業、団体等

3 確認検査員は、指針、手順書及びマニュアルに基づき、確認申請関係図書をもって、第1項の審査を行う。この場合、必要に応じ、建築主等に説明等を求めることとする。

4 財団は、法第6条の3第7項に規定する適合判定通知書又はその写し並びに施行規則第3条の12に規定する図書及び書類(以下「適合判定通知書等」という。)の提出を受ける前においては、次に定めるところによることとする。(た)

- (1) 都道府県知事又は指定構造計算適合性判定機関(以下「都道府県知事等」という。)から施行規則第3条の8(施行規則第3条の10又は第8条の2第8項において準用する場合を含む。次項第1号において同じ。)の規定により留意すべき事項が通知された場合にあつ

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

ては、当該事項の内容を確かめ、これに留意して審査し、及び当該通知をした都道府県知事等に対して、当該事項に対する回答を行う。

- (2) 申請又は通知に係る建築物の計画について都道府県知事等が別表(に)欄に掲げる判定すべき事項の審査を行うに当たって留意すべき事項があると認めるときは、施行規則第1条の4(施行規則第3条の3第1項又は第8条の2第2項において準用する場合を含む。)の規定により当該計画について判定の申請を受けた都道府県知事等に対して、当該事項の内容を通知する。

5 財団は、適合判定通知書等の提出を受けた後においては、次に定めるところによることとする。(た)

- (1) 都道府県知事等から施行規則第3条の8の規定により留意すべき事項が通知された場合にあつては、当該事項の内容を確かめ、これに留意して審査する。
- (2) 申請又は通知に係る建築物の確認審査の公正かつ適確な実施を確保するため必要があると認めるときは、適合判定通知書を交付した都道府県知事等に照会をする。(た)

6 補助員は、確認検査員の指示に従い、申請の受付、計画内容の予備審査等の補助的な業務のみを行い、確認を行わない。(り)

(消防長等の同意等)

第27条 財団は、法第93条第1項の規定に基づき、消防長等の同意を求める場合には、別記様式CF02に、建築主から提出された書類及び図書を添えて行う。(り)

2 財団は、法第93条第4項の規定に基づき、消防長等に対して通知を行う場合には、確認申請の引受後、遅滞なく別記様式CF03に、施行規則別記第3号様式による建築計画概要書を添えて行う。(り)

(保健所通知)

第28条 財団は、法第93条第5項の規定に基づき、保健所長に通知を行う場合には、確認申請の引受後、遅滞なく別記様式CF04により行う。(り)

(確認済証の交付等)

第29条 財団は、第26条第1項の審査の結果、申請に係る計画が、建築基準関係規定に適合することを確認したときにあつては確認済証(施行規則別記第15号様式)を、建築基準関係規定に適合しないことを認めたときにあつては適合しない旨の通知書(施行規則別記第15号の2様式)を、建築基準関係規定に適合するかどうかを決定することができないときにあつては適合するかどうかを決定することができない旨の通知書(施行規則別記第15の3様式)を、建築主に対しそれぞれ交付する。(り)(か)(た)

2 前項に規定する確認済証又は適合しない旨の通知書の交付は、確認申請関係図書のうち確認に要したものの1部を添えて行う。(り)(か)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

3 前項の図書の交付は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスク等にて行うことができる。(り) (か) (た)

(確認の申請の取下げ)

第30条 建築主は、建築主の都合により確認済証の交付前に確認の申請を取下げる場合は、その旨及び理由を記載した取下げ届(別記様式CF20)を財団に提出する。(り) (た)

2 財団は、前項の届出があったときは、審査を中止し、提出された確認申請関係図書を建築主に返却する。(か)

(確認を受けた計画の変更の申請)

第31条 確認済証の交付後に、当該確認を受けた建築物等の計画が変更(施行規則第3条の2に規定する軽微な変更を除く。)され、財団に当該変更計画の確認の申請がなされた場合の確認の業務の実施方法は、第23条から前条までの規定を準用する。(り)

(確認の記録)

第32条 確認検査員等は、申請のあった建築物等の計画の建築基準関係規定ごとの適否、確認業務の実施にあたり行った指示、指摘及びこれらに対する建築主等の回答、措置等を遅滞なく記録する。(り) (た)

第3節 中間検査

(中間検査申請)

第33条 建築主は、中間検査の申請に際し、施行規則第4条の8の規定による中間検査申請書に次に掲げる書面を添えて財団に提出する。(り) (か) (ね)

(1) 申請に係る工事中の建築物等の計画に係る直前の確認済証の写し

(2) 当該工事中の建築物等が中間検査合格証の交付を受けている場合は、当該合格証の写し

2 当該工事中の建築物等の計画に係る確認を行った者が財団である場合においては、建築主は、前項第1号に規定する書面の提出を要しない。(り) (ね)

3 当該工事中の建築物等の中間検査合格証の交付を行った者が財団である場合においては、建築主は、第1項第2号に規定する書面の提出を要しない。(り) (ね)

4 第1項の申請は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスクにて行うことができる。(り) (た)

(中間検査申請の引受及び契約)

第34条 財団は前条の申請があったときは、次の事項について審査してこれを引き受ける。(り) (か)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

- (1) 申請のあった工事中の建築物等が対象建築物等であること。
- (2) 工事監理者が当該工事中の建築物等の工事監理資格を有し、かつ建築士法の規定に違反していないこと。
- (3) 提出図書に不足がなく、かつ記載事項に漏れがないこと。
- (4) 第21条第2項の規定に該当するものでないこと。

2 財団は、前項の規定において、中間検査申請関係図書に不備を認めるときは補正を求め、補正の余地のないときは引き受けできない理由を説明し、中間検査申請関係図書を建築主に返却する。(り)(た)

3 第1項により申請を引き受けた場合には、財団は、建築主に引受承諾書(別記様式CF13)を交付する。この場合、建築主と財団は別に定める業務約款に基づき契約を締結したものとす。(り)

4 建築主が、正当な理由なく、引受承諾書に定める額の手数料を業務約款に規定する支払期日までに支払わない場合には、財団は第1項の引受けを取り消すことができる。(り)

5 財団は、前条及び前4項の規定にかかわらず、確認、中間検査、完了検査又は仮使用認定の申請件数が見込みを相当程度上回った場合において、適正に中間検査を実施することが困難な場合には、中間検査の業務を引き受けない。(り)(か)(た)(れ)

(業務約款に盛り込むべき事項)

第35条 前条の業務約款には、少なくとも次の事項を盛り込むこととする。(り)

- (1) 建築主は、財団が中間検査業務を行う際に、当該申請に係る建築物等、建築物等の敷地又は工事場に立ち入り、業務上必要な検査を行うことができるように協力しなければならない旨の規定
- (2) 建築主は、財団の請求があるときは、財団の中間検査業務遂行に必要な範囲内において、申請に係る工事中の建築物等に関する情報を遅滞なくかつ正確に財団に提供しなければならない旨の規定

(中間検査の実施)

第36条 財団は、中間検査を引き受けたときは、検査の対象となる工事が終了した日から3日以内のあらかじめ定めた中間検査予定日(財団又は建築主の都合により、中間検査予定日に検査が行えない場合は、別に協議して定める日)に、申請に係る工事中の建築物等が建築基準関係規定に適合するかどうかの検査を確認検査員に実施させる。(り)(た)

2 確認検査員等は、第26条第2項各号に掲げる者が建築主である建築物、又は制限業種に係る業務を行う建築物等について、中間検査の業務を行わない。(り)(か)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

- 3 確認検査員は、指針、手順書及びマニュアルに基づき、実地にて目視及び必要に応じて実施する外観の寸法の計測等により、第1項の検査を行う。この場合、必要に応じ、建築主等に説明等を求める。(り) (か)
- 4 補助員は、確認検査員の指示に従い、申請の受付、検査記録の作成等の補助的な業務のみを行い、中間検査を行わない。

(中間検査の結果)

- 第37条 財団は、建築主に対し、前条の検査の結果、特定工程に係る工事中の建築物等が、建築基準関係規定に適合することを認めるときにあつては中間検査合格証（施行規則別記第31号様式）を、建築基準関係規定に適合しないことを認めるときにあつては中間検査合格証を交付できない旨の通知書（施行規則別記第30号の2様式）をそれぞれ交付する。(り) (た)
- 2 前項に規定する中間検査合格証又は中間検査合格証を交付できない旨の通知書の交付は、第33条第1項に規定する書類のうち提出があつたもの1部を添えて行う。(り) (か)
 - 3 前項の図書の交付は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスク等にて行うことができる。(り) (た)

(中間検査の申請の取下げ)

- 第38条 建築主は、建築主の都合により、中間検査合格証又は中間検査合格証を交付できない旨の通知書の交付前に中間検査の申請を取下げる場合は、その旨及び理由を記載した取下げ届（別記様式CF08）を財団に提出する。(り) (た)
- 2 財団は、前項の届出があつたときは、中間検査を中止し、提出された中間検査申請関係図書を建築主に返却する。(か) (た)

(中間検査の記録)

- 第39条 確認検査員等は、当該工事中の建築物等の中間検査における建築基準関係規定ごとの適否、中間検査業務の実施にあたり行った指示、指摘、これらに対する建築主等の回答、措置等を遅滞なく記録するものとする。(り)

第4節 完了検査

(完了検査申請)

- 第40条 建築主は、完了検査の申請に際し、施行規則第4条の規定による完了検査申請書に次に掲げる書面を添えて財団に提出する。(り) (た) (ね)
- (1) 申請に係る建築物等の計画に係る直前の確認済証の写し
 - (2) 当該建築物等が中間検査合格証の交付を受けている場合は、当該合格証の写し

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

- (3) 当該建築物が建築物エネルギー消費性能の向上に関する法律（以下、「建築物省エネ法」という。）第12条第6項の規定による通知書の交付を受けている場合は、当該通知書の写し
- 2 当該建築物等の計画に係る確認を行った者が財団である場合においては、建築主は、前項第1号に規定する書面の提出を要しない。（り）（ね）
- 3 当該建築物等の中間検査合格証の交付を行った者が財団である場合においては、建築主は、第1項第2号に規定する書面の提出を要しない。（り）（ね）
- 4 当該建築物の建築物省エネ法第12条に基づく建築物エネルギー消費性能適合性判定（以下「省エネ適合性判定」という。）を行った者が財団であり、建築主から同意する旨の書面が提出された場合においては、財団が保有する当該建築物の省エネ適合判定通知書の写しを第1項第3号に規定する通知書の写しに、省エネ適合性判定に要した図書及び書類を施行規則第4条第1項第4号に規定する図書及び書類に代えることができる。（ね）
- 5 第1項の申請は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスクにて行うことができる。（り）（た）

（完了検査申請の引受及び契約）

- 第41条 財団は、前条の申請があったときは、次の事項について審査してこれを引き受ける。
- （り）（か）
- (1) 申請のあった建築物等が対象建築物等であること。
 - (2) 工事監理者が当該建築物等の工事監理資格を有し、かつ建築士法の規定に違反していないこと。
 - (3) 提出図書に不足がなく、かつ記載事項に漏れがないこと。
 - (4) 第21条第2項の規定に該当するものでないこと。
- 2 財団は、前項の規定において、完了検査申請関係図書に不備を認めるときは補正を求め、補正の余地のないときは引き受けできない理由を説明し、完了検査申請関係図書を建築主に返却する。（り）
- 3 第1項により申請を引き受けた場合には、財団は、建築主に引受承諾書（別記様式CF13）を交付する。この場合、建築主と財団は別に定める業務約款に基づき契約を締結したものとす。（り）
- 4 建築主が、正当な理由なく、引受承諾書に定める額の手数料を業務約款に規定する支払期日までに支払わない場合には、財団は第1項の引受けを取り消すことができる。（り）

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

5 財団は、前条及び前4項の規定にかかわらず、確認、中間検査、完了検査又は仮使用認定の申請件数が見込みを相当程度上回った場合において、適正に完了検査を実施することが困難な場合には、完了検査の業務を引き受けない。(り)(か)(た)(れ)

(業務約款に盛り込むべき事項)

第42条 前条の業務約款には、少なくとも次の事項を盛り込むこととする。(り)

- (1) 建築主は、財団が完了検査業務を行う際に、当該申請に係る建築物等、建築物等の敷地又は工事場に立ち入り、業務上必要な検査を行うことができるように協力しなければならない旨の規定
- (2) 建築主は、財団の請求があるときは、財団の完了検査業務遂行に必要な範囲内において、申請に係る建築物等に関する情報を遅滞なくかつ正確に財団に提供しなければならない旨の規定

(完了検査の実施)

第43条 財団は、完了検査を引き受けたときは、工事が完了した日又は完了検査の引受けを行った日のいずれか遅い日から7日以内のあらかじめ定めた完了検査予定日(財団又は建築主の都合により、完了検査予定日に検査が行えない場合は、別に協議して定める日)に、当該申請に係る建築物等が建築基準関係規定に適合するかどうかの検査を確認検査員に実施させる。(り)(た)

- 2 確認検査員等は、第26条第2項に掲げる者が建築主である建築物、または制限業種に係る業務を行う建築物等について、完了検査の業務を行わない。(り)(か)
- 3 確認検査員は、指針、手順書及びマニュアルに基づき、実地にて目視及び必要に応じて実施する外観の寸法の計測等により、第1項の検査を行う。この場合、必要に応じ、建築主等に説明、作動試験の実施等を求めることとする。(り)
- 4 補助員は、確認検査員の指示に従い、申請の受付、検査記録の作成等の補助的な業務のみを行い、完了検査を行わない。(り)(か)

(完了検査の結果)

第44条 財団は、建築主に対し、前条の検査の結果、申請に係る建築物等が、建築基準関係規定に適合することを認めたときあつては検査済証(施行規則別記第24号様式)を、建築基準関係規定に適合しないことを認めたときあつては検査済証を交付できない旨の通知書(施行規則別記第23号の2様式)を、それぞれ交付する。(り)(た)

- 2 前項に規定する検査済証又は検査済証を交付できない旨の通知書の交付は、第40条第1項に規定する書類のうち提出があったもの1部を添えて行う。(り)(か)(た)
- 3 前項の図書等の交付は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスク等にて行うことができる。(り)(た)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

(完了検査の申請の取下げ)

第45条 建築主は、建築主の都合により、検査済証又は検査済証を交付できない旨の通知書の交付前に完了検査の申請を取下げの場合は、その旨及び理由を記載した取下げ届（別記様式CF20）を財団に提出する。（り）（た）

2 財団は、前項の申請があったときは、完了検査を中止し、提出された完了検査申請関係図書を建築主に返却する。（か）（た）

(完了検査の記録)

第46条 確認検査員等は、申請のあった建築物等の完了検査における建築基準関係規定ごとの適否、完了検査業務の実施にあたり行った指示、指摘、これらに対する建築主等の回答、措置等を遅滞なく記録するものとする。（り）

第5節 仮使用認定

(仮使用認定申請)

第47条 建築主は、仮使用認定の申請に際し、施行規則第4条の16第2項の規定による仮使用認定の申請書、図書及び書類に次に掲げる書類を添えて財団に提出する。（れ）（ね）

- (1) 申請に係る建築物等の計画に係る直前の確認済証の写し
- (2) 当該建築物等が中間検査合格証の交付を受けている場合は、当該合格証の写し
- (3) 当該建築物が省エネ適合判定通知書の交付を受けている場合は、当該省エネ適合判定通知書の写し並びに省エネ適合性判定に要した図書及び書類

2 当該建築物等の計画に係る確認を行った者が財団である場合においては、建築主は、前項第1号に規定する書面の提出を要しない。（れ）（ね）

3 当該建築物等の中間検査合格証の交付を行った者が財団である場合においては、建築主は、前項第2号に規定する書面の提出を要しない。（ね）

4 当該建築物の省エネ適合性判定を行った者が財団であり、建築主から同意する旨の書面が提出された場合においては、財団が保有する当該建築物の省エネ適合判定通知書の写し並びに省エネ適合性判定に要した図書及び書類を第1項第3号に規定する通知書の写し並びに図書及び書類に代えることができる。（ね）

5 第1項の申請は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスクにて行うことができる。（れ）

(仮使用認定申請の引受及び契約)

第48条 財団は、前条の申請があったときは、次の事項について審査してこれを引き受ける。（れ）

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

- (1) 申請のあった建築物等が対象建築物等であること。
 - (2) 提出図書に不足がなく、かつ記載事項に漏れがないこと。
 - (3) 第21条第2項の規定に該当するものでないこと。
- 2 財団は、前項の規定において、仮使用認定申請関係図書に不備を認めるときは補正を求め、補正の余地のないときは引き受けできない理由を説明し、仮使用認定申請関係図書を建築主に返却する。(れ)
- 3 第1項により申請を引き受けた場合には、財団は、建築主に引受承諾書(別記様式CF13)を交付する。この場合、建築主と財団は別に定める業務約款に基づき契約を締結したものとす。 (れ)
- 4 建築主が、正当な理由なく、引受承諾書に定める額の手数料を業務約款に規定する支払い期日までに支払わない場合には、財団は第1項の引受けを取り消すことができる。(れ)
- 5 財団は、前4項の規定にかかわらず、確認、中間検査、完了検査又は仮使用認定の申請件数が見込みを相当程度上回った場合において、適正に仮使用認定を実施することが困難な場合には、仮使用認定の業務を引き受けない。(れ)

(業務約款に盛り込むべき事項)

第49条 前条の業務約款には、少なくとも次の事項を盛り込むこととする。(れ)

- (1) 建築主は、財団が仮使用認定業務を行う際に、当該申請に係る建築物等、建築物等の敷地又は工事場に立ち入り、業務上必要な検査を行うことができるように協力しなければならない旨の規定
- (2) 建築主は、財団の請求があるときは、財団の仮使用認定業務遂行に必要な範囲内において、申請に係る建築物等に関する情報を遅滞なくかつ正確に財団に提供しなければならない旨の規定

(仮使用認定の実施)

第50条 財団は、仮使用認定の申請を引き受けたのち速やかに、申請に係る計画が基準告示第1に定める基準に適合しているかどうかの審査を確認検査員に実施させるとともに、あらかじめ定めた仮使用認定の検査予定日(財団又は建築主の都合により、仮使用認定の検査予定日に検査が行えない場合は、別に協議して定める日)に、当該申請に係る建築物等が基準告示第1に定める基準に適合するかどうかの検査を確認検査員に実施させる。(れ)

- 2 確認検査員等は、第26条第2項に掲げる者が建築主である建築物、または制限業種に係る業務を行う建築物等について、仮使用認定の業務を行わない。(れ)
- 3 確認検査員は、手順書及びマニュアルに基づき、仮使用認定申請関係図書及び必要に応じて求める建築主等の説明等をもって第1項の審査を行い、実地にて目視及び必要に応じて実施する外観の寸法の計測等により第1項の検査を行う。(れ)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

4 補助員は、確認検査員の指示に従い、申請の受付、計画内容の予備審査又は検査記録の作成等の補助的な業務のみを行い、仮使用認定を行わない。(れ)

(消防長等への照会)

第51条 財団は、前条第1項の審査又は検査の際、基準告示第1に定める基準のうち消防法第9条、第9条の2、第15条及び第17条に適合するかどうかを消防長等に照会する場合には、別記様式CF44に、建築主から提出された書類及び図書を添えて行う。(れ)

(仮使用認定の結果)

第52条 財団は、建築主に対し、第50条の検査の結果、申請に係る建築物等が、基準告示第1に定める基準に適合することを認めたとときにあっては施行規則別記第35号の3様式による仮使用認定通知書を、基準告示第1に定める基準に適合しないと認めるときにあっては基準告示第1に定める基準に適合しないと認める旨の通知書(別記様式CF45)を、それぞれ交付する。(れ)

2 第1項に規定する仮使用認定通知書又は基準告示第1に定める基準に適合しないと認める旨の通知書の交付は、第47条第1項に規定する書類のうち提出があったもの1部を添えて行う。(れ)

3 前項の図書の交付は、あらかじめ財団と協議した上で財団が指定する方法で、電子情報処理組織又は磁気ディスク等にて行うことができる。(れ)

(特定行政庁への仮使用認定報告書の提出)

第53条 財団は、法第7条の6第3項の規定に基づき、特定行政庁に仮使用認定報告書を提出する場合には、施行規則別記第35条号の4様式により行う。(れ)

(仮使用認定の申請の取下げ)

第54条 建築主は、建築主の都合により、仮使用認定通知書又は基準告示第1に定める基準に適合しないと認める旨の通知書の交付前に仮使用認定の申請を取下げの場合は、その旨及び理由を記載した取下げ届(別記様式CF20)を財団に提出する(れ)

2 財団は、前項の届出があったときは、仮使用認定を中止し、提出された仮使用認定申請関係図書を建築主に返却する。(れ)

(仮使用認定の記録)

第55条 確認検査員等は、申請のあった建築物等の仮使用認定における基準告示第1に定める基準ごとの適否、仮使用認定業務の実施にあたり行った指示、指摘、これらに対する建築主等の回答、措置等を遅滞なく記録するものとする。(れ)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

第4章 確認検査手数料等

(確認検査手数料の設定)

第56条 財団は、確認検査の業務の実施にかかる手数料を確認検査業務手数料規程に定める。

(り) (か)

2 手数料の増額又は減額を行う場合には、改定後の額とその理由、適用時期について、事前にウェブサイトへの掲載その他適切な方法により公表を行う。(た)

(確認検査手数料の収納)

第57条 建築主は、確認検査手数料を銀行振込みにより納入する。ただし、緊急を要する場合には別の収納方法によることができる。(り) (た)

2 前項の払込に要する費用は建築主の負担とする。(り) (た)

3 財団と建築主は、別途協議により、一括の納入等別の方法を取ることができるものとする。(り)

4 財団は、類似する建築物の確認、中間検査、完了検査及び仮使用認定等確認検査の業務が効率的に実施できる場合、又は地域の実情等により特に必要と認められる場合にあっては、実費を勘案して確認検査手数料を減額することができるものとする。(り) (る) (れ)

(確認検査手数料の返還)

第58条 収納した確認検査手数料は返還しない。ただし、財団の責に帰すべき事由により確認検査が実施できなかった場合には、建築主に返還する。(り)

第5章 確認検査の業務の監視、改善方法

(監視委員会による監視等)

第59条 財団は、次の各号に掲げる者で委員を構成する監視委員会を設置するものとする。

(り) (か) (た)

- (1) 弁護士会の推薦する者
- (2) 消費者団体の推薦する者
- (3) 建築物の計画及び意匠に関する学識者
- (4) 建築物の構造に関する学識者
- (5) 建築設備に関する学識者
- (6) 財団の監査役

確認検査業務規程

頁 No.21 / 24

CRO 1 - 2 1

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

2 監視委員会は、次の各号に掲げる業務を行うものとする。(た)

- (1) 確認検査業務規程の審議
- (2) 財団から提出された理事会の議事録の確認
- (3) 財団が行った確認検査の業務に関する技術的検査を行わせる第三者の指名
- (4) 前号の規定による指名を受けた者が行った技術的検査の結果の確認
- (5) 係争事件に係る監査
- (6) その他確認検査の業務の公正かつ適確な実施のために必要な監査等

3 前項第3号の規定により監視委員会が指名した者は、財団が行った確認検査の業務に関する技術的検査を行い、その結果を財団に報告するものとする。(た)

4 監視委員会は、毎年度2回以上第2項各号に掲げる業務を行い、当該業務の終了後30日以内に国土交通大臣に報告するものとする。(た)

5 財団は、前項の規定による報告において国土交通大臣より改善の指摘を受けたときは、当該指摘事項の改善のために必要な措置を講じるものとする。(た)

(苦情処理)

第60条 財団は、確認検査の業務について建築主、その他の関係者から苦情を受けた場合は、確認検査業務等苦情処理規程(CESR10)の規定に基づき適正かつ公平に処理する。(り)
(か) (た)

2 財団は、法第94条第1項に規定する審査請求が行われた場合において、これに適切に対処する。(り)

3 前2項の苦情、審査請求及びこれらに対して財団がとった処置は、遅滞なく記録し、適切に保管する。(り)

(内部監査)

第61条 理事長は、担当役員以外の役員から監査員を任命し、顧客の要求事項を満たしているか、また、適正な確認検査の業務管理体制が維持されているかどうかを検証するため、原則として年1回、監査員に内部監査を実施させる。(り) (か)

2 内部監査においては次に掲げる事項を監査する。(り) (か) (た)

- (1) 法令、指針、これらに関わる技術的助言及びその他関係法令への適合状況
- (2) この規程への適合状況
- (3) 第3条第2項に規定する業務の実施に関する基本方針への適合状況
- (4) 確認検査の業務の管理体制の状況
- (5) この規程の内容の見直しの必要性

3 被監査業務の責任者は、発見された不具合及びその原因を排除するために処置を講ずる。当

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

該監査を実施した監査員は講じた処置を検証し、その結果を担当役員に報告するものとする。

(り) (か)

(不適格案件の管理)

第62条 財団は、不適格案件（建築基準関係規定に適合しない又は適合するかどうかを決定することができない案件について、誤って確認済証、中間検査合格証、検査済証又は仮使用認定通知書を交付したものをいい、法第6条の2第6項又は法第7条の6第4項に規定する通知を受けた案件を含む。以下同じ。）が発生した場合について適切な処理を確実に実施する。(り)

(た) (れ)

2 財団は、確認済証、中間検査合格証、検査済証又は仮使用認定通知書が不適格案件であると確認されたときは、速やかに建築主、国土交通大臣及び特定行政庁にその旨を報告するとともに、特定行政庁の指示のもと適切な措置をとる。(り) (か) (れ)

3 担当役員は、不適格案件について、案件の概要、不適格の内容、講じた措置等の内容に関して、記録し、適切に保管する。(り) (か)

(再発防止措置)

第63条 担当役員は、不適格案件の発生その他により確認検査の業務の管理体制に不適切な内容が発見されたときには、再発防止等のため、発生原因を除去するための処置（以下「再発防止措置」という。）をとる。再発防止措置は発見された不適格案件等の影響に見合ったものとする。(り) (か)

2 担当役員は、再発防止措置に関する以下の事項を行う。(り) (か)

- (1) 不適格案件の内容確認
- (2) 不適格案件発生の原因の特定
- (3) 不適格案件が再発しないことを確実にするための処置の必要性の評価
- (4) 必要な措置の決定及び実施
- (5) 実施した処置の結果の記録
- (6) 再発防止措置において実施した活動の評価

第6章 その他確認検査の業務の実施に関し必要な事項

(書類の備置及び閲覧)

第64条 財団は、法第77条の29の2に基づく書類の閲覧の求めに適切に対応するために、本部及び大阪事務所における閲覧場所を指定するとともに、必要な設備及び体制を整備する。

(り)

確認検査業務規程

頁 No.23/24

CRO 1-21

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

2 閲覧させる書類は、法第77条の29の2各号に掲げるものとする。(か)

3 理事長は、前2項に定めるもののほか、第1項の閲覧に関する事項を別に定め、確認検査の業務を行う事務所における備付けその他の適当な方法により公開する。(か)

(事前相談)

第65条 財団に確認、中間検査、完了検査又は仮使用認定を申請しようとする建築主は、申請に先立ち、財団に事前に相談をすることができる。(り)(か)(れ)

(電子情報処理組織に係る情報の保護)

第66条 財団は、電子情報処理組織による申請の受付及び図書の交付を行う場合は、情報の保護に係る措置について別に定めることとする。(り)

(機密情報管理)

第67条 財団の役員及びその職員並びにこれらの者であった者は、確認検査の業務に関して知り得た秘密を漏らし、又は盗用してはならない。(へ)(り)(か)

(図書が円滑に引渡しされるための措置)

第68条 財団は、確認検査の業務の全部を廃止しようとするときは、法第77条の34第1項の規定に基づく届出の前に、次に掲げる事項を行うものとする。(り)(か)(た)

- (1) 指定機関省令第31条第1項の規定により引き継ぐべきすべての書類の存否を確認すること。
- (2) 特定行政庁ごとに、前号に規定する書類を分類し、保存すること。
- (3) 第1号に規定する書類の特定行政庁ごとの一覧表を作成し、当該特定行政庁に提出すること。
- (4) 第1号に規定する書類の特定行政庁別の件数及び存否状況並びに第2号の分類及び保存が完了したことを国土交通大臣に報告する。なお、紛失があった場合は国土交通大臣の指示に従い、書類の回復に代わる措置(建築主からの副本の借り受け及び複写等)を講じること。

2 前項に定めるもののほか、財団は、指定機関省令第31条第1項の規定に基づく書類の引継ぎを行うこととなった場合に、円滑に引渡しを行うことができるよう、あらかじめ必要な措置を講じる。(か)

(指定区分等の掲示)

第69条 財団は、指定の区分、業務区域、指定の番号、指定有効期間、機関の名称、代表者氏名、主たる事務所の住所及び電話番号、取り扱う建築物等の内容及び実施する業務の態様を、本部及び大阪事務所において公衆に見やすいように掲示する。(り)(か)

1999年 5月 6日制定

2017年10月 5日改訂

2017年10月30日施行

別 紙

確認検査対象建築物等

以下の各項のいずれかに該当する建築物、工作物及び建築設備を確認検査対象とする。

1. 建築基準法（以下「法」という。）第68条の25の規定に基づく構造方法等の認定及び法第68条の26の規定に基づく特殊構造方法等の認定を受けて建築される建築物（当該建築物の計画に含まれる建築基準法施行令（以下「令」という。）第138条第1項及び第2項第1号に掲げる工作物（以下「工作物」という。）を含む。）（れ）
2. 法第88条第1項において準用される法第68条の25の規定に基づく構造方法等の認定及び法第68条の26の規定に基づく特殊構造方法等の認定を受けて築造される工作物（れ）
3. 以下の各号に掲げる建築物
 - (1) 高さが31mを超え60m以下の建築物
 - (2) 延べ面積が500㎡を超える建築物（そ）
 - (3) 令第147条の2の各号に掲げる建築物
 - (4) 建築物の高さと短辺方向の幅との比が6を超える鉄骨造建築物
 - (5) 建築物の高さと短辺方向の幅との比が4を超える鉄筋コンクリート造建築物
 - (6) 建築物の4層以上にわたって片側土圧を受ける建築物又は建築物の高さ方向に10m以上にわたって片側土圧を受ける建築物
 - (7) 構造耐力上主要な柱、梁又は耐力壁をプレキャスト鉄筋コンクリート造とした建築物
 - (8) 構造耐力上主要な部分に設計基準強度が36N/m²以上のコンクリートを使用する建築物
4. 令第82条の5に規定する「限界耐力計算」及び令第81条第2項第1号ロに規定する限界耐力計算と同等以上に安全性を確かめることができるものとして国土交通大臣が定める基準に従った構造計算並びに令第108条の3に規定する「耐火性能検証法」、令第129条に規定する「階避難安全検証法」及びに令第129条の2に規定する「全館避難安全検証法」により設計が行われた建築物（れ）
5. 令第80条の2の規定に基づき国土交通大臣が定める安全上必要な技術的基準（平成12年建設省告示第2009号、平成14年国土交通省告示第463号、平成14年国土交通省告示第464号、平成14年国土交通省告示第666号に限る。）に従った構造の建築物（た）（れ）（つ）
6. 前各項に掲げる建築物及び工作物と同一敷地内にある別棟の建築物及び工作物、並びに、前各項に掲げる建築物及び工作物と隣接又は近接敷地にあり、同時期に一体的に計画される建築物及び工作物
7. 建築物に設けられる昇降機その他の建築設備
8. 第2項及び第6項に掲げる新たに築造される工作物に設けられる建築物及び昇降機